

福岡

福祉活動専門員の

ま な こ

社協活動前進のために

No. 9 昭和53年12月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 福岡コロニー

わが子への愛を 世界のどの子にも

昭和五十四年は、国連の「児童の権利宣言」から二十周年に当たり、これを記念した「国際児童年」で、子どもの人権の尊重、福祉の向上、教育の充実をめざして各種の行事が国際的に行

なわれます。
また、四月からは養護学校が義務制になり、すべての障害児も学校教育が受けられるようになりますが、左に紹介する「つくし……そして春」という

詩に歌われているようなことは、もう今後ないのだろうか。
この詩は、奈良たんぼの会が毎年行なっている「わたぼうしコンサート」で歌われたもので、この詩と他に十編の詩に曲をつけた、わたぼうしのレコード「メロディーありがとう」というLPレコードに入っています。一度聞いてみてはいかがですか。



つくし……そして春

おかあちゃん つくしがもう出てる
隣のユキちゃんも サッチちゃんも
一年なんやて ピカピカランドセル
買うてもうて 明日から学校へ行くんやて
おかあちゃん つくしがもう出てる

おかあちゃん もう泣かんといて
また駄目やったんやね おかあちゃん
入学拒否なんてむずかしいことばなんか
あたいは 知らへん ええのや
あたいはお家で遊ぶ

おかあちゃん もう泣かんといて
おかあちゃん 桜がきれいやね
なんで悲しそう おかあちゃん
あたし学校へ行きたいのや
どうして あたしだけ行ったらいけへんの
手が動かんだけなのに
おかあちゃん 桜がきれいやね

学校って意地悪や 大人は意地悪や
なんにもなんにも あたし悪いことしてへんのに
おかあちゃん つくしがもう出てる

夏休み学童保育を試みて

八月二日から夏休み期間中、桂川町社協では、母子家庭、父子家庭、共働き家庭の小学校一年から四年生までの子どもたち三十人を預かり、

午前中は夏休みの友を中心に学習、午後は集団遊びを中心としたカリキュラムで夏休み学童保育所「すずめの学校」の開設に踏み切った。

現在、桂川町内には母子家庭が百三世帯あり、先に母子家庭の実態調査を実施した。その結果、お母さん方の要望として、「学童保育の必要性」が訴えられることも

に、小学校低学年を持つ父兄からぜひ学童保育をやって欲しいとの声が寄せられた。

もともと、社協では、地域社会のなかで起きている身近な生活福祉問題について話し合いを重ね、問題解決の援助、行政サービスに先んじて先駆的、実験的活動を行い、行政制度を充実させる役割があります。お世話することには本来社協がなすべきことなので、学童保育の要望は置きざりにできない。

まして、日本の将来を背負っていく子どもたちが長い夏休みを独りぼっちでいるということは見過ごせない事実であり、不良化、非行化を抱えた問題児とならないためにも、子どもを守る立場から社協の民間性を生かし取り組むことになった。

「すずめの学校」の一カ月を振り返ってみると、いろいろな課題にぶつかった。こちらのねらいであった年齢と学年の差を越えた子ども集団が繰り広げた生活のなかに、学校や家庭で得られない教育効果があったのだろうか？ 子ども間での助け合い、学び合いが一日のカリキュラムの中で果たして生まれたのだろうか？ はなはだ自信はない。

しかし、初めて経験した年齢と学年の差を克服した、たて割り保育の重要性が私なりに受け止められたような気がするのである。

「すずめの学校」に通う「すずめ」たちは、玄関に入ると家庭を忘れ、ふたたび水を得た魚のごとく元気でしゃいでいたように見えたのである。

記憶に乏しいが、労働省統計によると、婦人労働者千八百八十六万人のうち六割が既婚婦人で、その二五パーセント、

トが小学生の児童を持つ母親であり、厚生省統計の全国小学生約九百四十万人のうち、二百十万人が共働き家庭の児童だといふのです。

このような状況のなかで、民間サイドから福祉のまちづくりを進めていこうとすれば、年度の「すずめの学校」での貴重な体験を生かし、桂川町内における学童保育所づくりなどの組織化をこれからの課題とし、当然だれかに代弁されなければならない児童の権利をクローズアップしていきたい。

さまざまな福祉問題の解決は人間の生存権と価値観の再認識にあり、本来もっている心の豊かさの再生をどう植えつけ、どう生かされるか、試行錯誤する中で、真の福祉の前進を願い、少教者の立場での福祉のまちづくりが、福祉活動専門員として四年目を迎え、私なりに考え、何ができるか、問い直すつもりでがんばりたい。立前プラス本音イコール実践で。

ここに、実験夏休み学童保育所「すずめの学校」の開設の動機と反省と今後の方向についてのまとめとします。

(桂川町社協 安藤)

留居家庭児童に学童保育所を

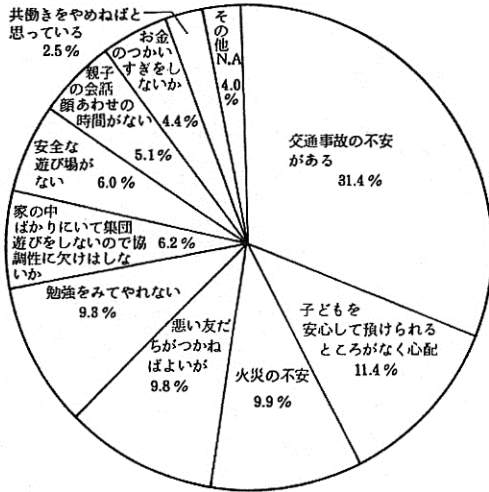
学童保育所がほしい

切実な共働き家庭の実態調査
であきらかになる

「あなたは学童保育所が必要ですか」――久留米市社協は三月、市内に通う全保育所の年長組児童（今春、新一年生児童）の父母を対象に「学童保育に関するアンケート調査」を行なった。その結果によると、「放課後、何らかの形で子供を預かる所が欲しい」とする親は回答者の約七割。うち九割以上の親は、はっきり「学童保育所が必要」としている。久留米市では同種の調査はほとんどとされておらず、社協では、この結果を基に、学童保育所づくり運動を盛り上げていくこととしている。学童保育とは、共働きや母子・父子家庭のほか、忙しい自営業の家庭・病弱者のいる家庭などの児童、特に小学生低学年を対象に、放課後から午後五時ごろまで、遊びや勉強の面倒をみるもの。母子家庭のほか最近の共働き家庭増で、学童保育所の必要性が叫ばれてきたが、二〇万都市の本市では、住民の手でつくられたM校区一ヶ所のみ。今回の調査は約九百人の対象中、

表1

あなたのお子さんが小学校に入学されたら、下校後(放課後)どのようなとりあつかいや心配をされていますか。



四百七十一人が回答したものの。設問は「母親が働く理由は何か」「子どもが小学校に入ったあと、放課後どんな心配があるか」「学童保育所は必要か」など十二問からなっている。今回の調査で社協で注目したのは、ほとんどの母親が(三百八十五人 八二%)が働いていることで、うち一週間に六七七日働く母親が三百人もいたことである。「子どもの教育費を得るため」(百十五人)「自分が働かないと生活できないので」(百五人)など切実な理由が多く、主婦労働が余分の生活費を得るのにはあたらないことが分った。また、「放課後の子どもに対する不安は？」

という設問に対し、「交通事故」三百三人。「非行への不安」九十五人。「勉強をみてやれぬことへの不安」九十八人(重複回答)などとなっており、「学童保育を毎日必要とする」百五十人。「必要に応じて預けるところがほしい」百七十四人。などであった。社協では、こうした結果を背景に①夏休み中に実験的学童保育所「チビツ子村」を開設する。②親やボランティア、福祉関係者などとニードの強かった地区別の「学童保育問題研究会」を開くなどして、学童保育所づくりの運動を盛り上げていくこととしている。(久留米市社協 松尾)

表2

お子さんは下校後どのような過しかたをさせますか。

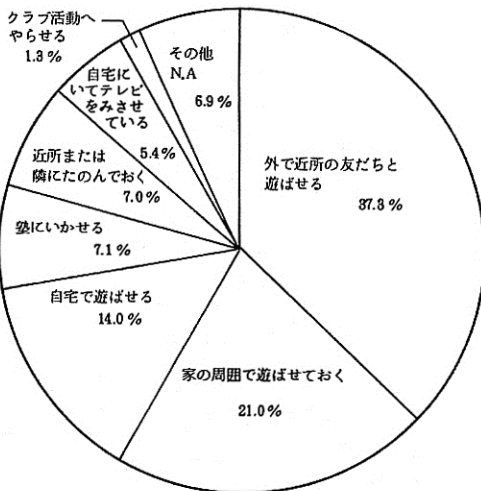
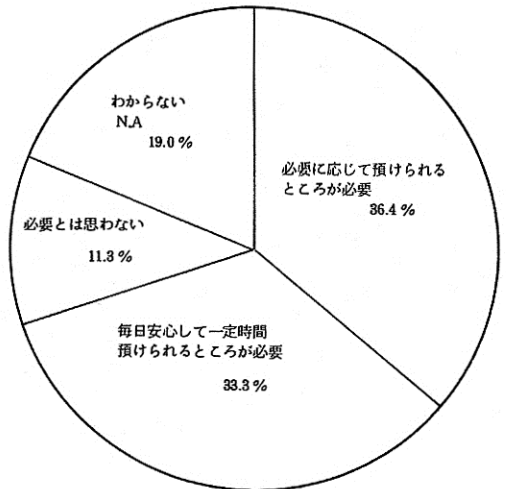


表3

お子さんが下校したあと安心して預けられるところの必要性について、どう思われますか。



交通事故に遇って 思ったこと

私は本年三月末、ふとしたことから交通事故に遇ってしまった。年度末の仕事のあい間をみて二日間の休暇をとり、十年余り勤めをともしした東京の同僚たちに会うため上京し、数人と道路を横断中、タクシーに接触転倒し、左下腿骨を骨折したのである。なにしら、東京行き靴の左足首が、いたましいばかりに屈折しているのを見て、痛さより驚きに色を失った。

それから杖を片手に、なんとか車のクラッチを踏み、勤務に出れるようになるまで二ヶ月半、入院が一ヶ月、自宅でギブスをつけた生活が一ヶ月と、とにかく生まれて初めての、痛くて、苦しくて、イライラして、あせった期間を過し、得がたい体験をさせられた。「のどもと過ぎれば……」の喩えのとおり、苦痛も反省も少しずつ遠ざかりつつあるが、今も事故の一瞬を思いおこすと、背にその時の戦慄が走る。この間感じたことなどを、この機関紙には不向きかもしれないが書いてみたい。

私はとにかく事故の瞬時から加害者との交渉に泣かされたが、①保険金の請求手続が大変やっかいで、保障も実際には小さなものであること。保険の加入については、セールスマンがお

みやげをつければかりにし、印かん一つで手続きは済むのに、請求となると難解で、繁雑で、何枚もの添付書類をみたとき

町の中心街に大きな店舗をかまえる保険会社をうらめしく思ったものである。また加害者が名にし負う相手だけに難儀をしたが、②事故はケガの程度や状況より、加害者の人格により、その保障がちがってくる。私は今度の事故で初めて知ったが、タクシーのほとんどが任意保険に加入していないという。車そのものが商売道具であるのに。

私の入院期間中の見舞客のほとんどが、ケガがこの程度ですんだことを慰さめてくれると同時に、加害者でなくてよかったといひ、かえって加害者が泣いている例を聞かされた。

先日の新聞では、車を作る会社が日本一の企業になったと報じている。車はもうわれわれの生活から切り離せない必需品になっているが、一方で、この瞬間にも同名かの人が自傷し命をおとしているというのに、保障の大原則すら確立されず、大きな声を出した方が勝ち、小さな声の方が被害者になって泣かされるといったことがおこっている。

今度の事故で感じたことは、とにかく人ごとではない。そしてその時はなんとかなると思ってきたがなかなかなんとかならないものであるということである。一瞬にして命をうばわれたり

腰を打ったり、頭を打ったりして、ベッドで一を生を送ることになった人たちのことを思うと、身が震え心が痛む。命を本当に大切にし、そんな人たちに心をはせる人がふれば、事故は少なくなり泣く人も少なくなるのではあるまいか。

(飯塚市社協 石上)

小さくとも 大きな感動

福祉活動専門員に課せられた任務の重さをヒシヒシと感ずるのは専門員のみだろうか。人の痛みを我が身に感ずる、これがボランティアの心と言われるが、ボランティアのみでなく福祉にたずさわる者はすべてこの心であってほしい。人間社会は食うか食われるかの生存競争だと野獣の世界のように言われるが、これは短的表现にすぎない。この厳しい世の中で専門員は福祉だ、ボランティア活動だ、住みよい福祉社会をつくらう、恵まれない人達の福祉を高めよう——と呼びかけ実践活動の先頭に立たねばならない。アー考えればゾッと身震いしたくなる。しかし、弱気は禁物、我が身我が心にむち打ってヨシ、やるぞと力んでみるが暫くすると意気消沈、又弱い自分になりさがる。この繰り返しの連続

でもやらなければ職務は果せない。昨年の専門員研修会でだれかが発表された事例からヒントを得て、昨年十一月に実施計画を立て対象老人に誘いかけたが寒い時期で中止していた「独居老人一日慰安激励会」を去る六月十三日に実施した。小さな小さな福祉行事に相違ない。しかし、参加老人の喜びと感動は大きかった。日常生活に事欠き介助される老人なればの感激だろう。対象者四十数名中出席者二十一名だったが、マイクロバスで各自宅まで送迎した。黒木町老人センターまで、二十キロ車窓の眺めは美しく、緑の山、青く澄みきった矢部川の清流奇岩、舗装された道や点在する民家の立派さなど、二十数年来自宅から一歩も外出したことのない老人の驚き語らひは、車中をにぎやかにした。

センターでの一日は入浴にくつろぎ昼食、飲み物や粗糲に舌鼓を打ちながら談笑にふけり、各老人は自分一人が不幸な星の下で孤独な生活をしていると思ひ込んでいた。仲間がいた、友人ができた、心強くなった、自信が生まれたお互いに励まし助け合って、一年でも二年でも健康に留意し長生きしようとうと励まし合われた。今日は参加して本当に良かった有難かったと心底からお礼の言葉を耳にすることができ感動を共にする一日であった。さらに明日への福祉を求め実践しようとして誓った。

(筑後市社協 紫原)

インスタント専門員

専門員の皆様、こんにちは、新人生ですのよろしくご指導の程、お願いいたします。

失礼とは存じますが、自己紹介を、したいものと思えます。

とうねん(十年)とって二十六才。昭和十七年四月桜の花が満開の折、この世に誕生しまして、妻一人、子ども三人(女の子ばかり)生産させ、五人家族です。職種遍歴は、授業料を四年間、無事納めて、領収書の

変りに法学士を頂き、京都にて就職、六年間サラリーマンを経験し、古里恋しく、篠栗に帰って、二年間スナック経営して見事、客にタダ飲みされ、自分で飲み倒して、経営に失敗、これにて、青年実業家の夢破れ、よし、一から出直しと思ひ、履歴書には、仮粹大工と記入しますが、土木大工のことです。これを五年、一人前の手前に来たところ、元事務局長である、西久助先生の紹介により、現在にある。



社会福祉とは何ぞや、福祉ってどんな事するっちゃうるか、専門員って何をするとね。自問自答して来たのですが、ただ目の前にぶら下がって来たことに、ただ全身全霊を打ち込んでみて失敗、失敗の繰返しをして、今度こそ今度こそと思つて頑張っている。ひとりの専門員のまねをしている専門員です。

(篠栗町社協 飯島)



社協に専門員として就職して三ヶ月が過ぎました。やっと三ヶ月間の臨時期間を終え、現在専任職員として福祉活動にたずさわっています。変わったことと言えば、日給から月給になったことかな。

「軽い袋やなあーっ、千円札してくれればもう少し多く感じるのに。」なんて思ったこともありまして。今でこそ電話の応対も何とかできるようなになったが、当初それはひどいものでした。

リン、リン、「はい福祉センターです。」「世更のことで聞きたいので

すが……。」「……?、ちょっとお待ち下さい、代わりますから。」

リン、リン、「はい福祉センターです。」「香典返しのこと……。」「こちら葬儀屋ではありませんが。」「いえ香典返しをしたいんです。」「えっ、香典返し?、ちょっとお待ち下さい。」「」

またまた失敗、何が何だかさっぱりわからない。あまりにも業務内容の多いことには驚かされる。

社協関係誌や自分が想像していたような専門員の職務とは、ほど遠いような気がするが、限られた職員数では当然といえるかもしれない。

この記事を読まれた諸先輩方は、「田川市社協はまぬけな奴が専門員になったものだなあ」と思われるかも知れません。でも、小生にはみなさんにはげたいに敗けないものがあります。専門員、三ヶ月にして敗けないもの……。何だと思われませんか? それは若さです。

当年二十二才、昭和三十年十月二日生まれた若年兵です。

この若さを思い切り社協活動にぶつけて地域福祉の向上を……。ちよつとカッコいいこと言ひすぎたかな。へへ。何はともあれ、これから専門員として社協に足を踏み入れた小生です。諸先輩方にはいろいろと御指導していただきたく思いますので、よろしくお願ひいたします。

(田川市社協 十時)

「まなこ」裏方の独白

●今年の四月になって、人事異動で地域課に替ってきて、専門員の担当になりましたが、その専門員連絡会の自主的(?)な広報紙である「まなこ」の発行に初めて、関わったわけですが、今回の発行に際して、原稿依頼をしてきた結果がやっと思えたという感じがしています。……。

●「まなこ」を出すときに、いつでも編集後記に書かれることバツテン、みんなに原稿依頼バしても、イッチョン出てこんで、編集委員(?)が、いつも苦労しよります。それで結局、原稿が足りんケンて言うて、同じ人バツカイに原稿バ書いてもらいよるゴトあるケン、「まなこ」にやいっつも同じ名前バツカイでできようと思わんカイナ。

●特に今度の場合は、約五十名もおる専門員みんなに原稿バお願いしましたバツテン、実際に原稿が出てきたとは六名しか出てこんやっただです。

この「まなこ」バ、専門員みんなのものにすうとには、どげなふうにしたらよかかわからんバツテン、みんなが地元の広報紙に書きよるコトバ、少しづつ「まなこ」にも、まわしてもらたら、良かったなろうか。

(明)

十月十一、二日に社協専任職員研修会が柳川市において開催されましたが今回の研修会で出てきた内容をあげてみると、第一に社協職員の間でも、出てくることで、給与が極端に低いことにより、有望な若手職員が希望して、入ってくる職場ではないようなところが多い、そのうえ、専門員はもちろんのこと専任職員の中にも、労働基準法に違反するような労働条件の悪さがある。これらの待遇改善については、各市町村社協では、二・三人の職員しかいずに、職員が社協会長に直接要求をすれば、角が立つのではないか。それで県段階で要望をまとめて、各市町村社協会長あて内容改善を要求してほしいとの意見が多かった。

第二には、現在福祉活動専門員の学習の場は、県社協およびブロック連絡会の開催による場が多いが、しかし、専任職員の場合には、年に一回程度の研修があるだけで、もっと研修をブロックごとにするなり、担

社協職員の 連帯を求めて

当内容別にするなどの配慮をしてほしい。また、今回の研修会をみても専任職員研修会ということで、未法人社協で役場の職員が兼務しているところは、対象となっていないが、兼任職員にも社協についての学習の機会がなければ今後ますます未法人社協と未法人社協との社協活動がかけ離れるばかりではないだろうかとの意見があった。

最後に、社協職員相互の横のつながりをつけることが必要なのではないかとの意見が多かった。この研修会をきっかけにして、県内社協職員連絡会というものを、各個人の自由参加の形で発足してもよいのではないだろうか。なお、福岡県には現在、福祉活動専門員のみを対象にした専門員連絡会はあるが、他

県においては、県内の社協職員全員を対象にした社協職員連絡会を作っているところが数ヶ所ある。

■社協職員連絡会についての要望や意見があったら、ぜひ、出してください。■

市町村社協の動向

またまた、いつものように専門員の新旧交代がありました。

田川市 山下 弘(退職)

三橋町 十時智治(新規)

立花町 山田国雄(退職)

高須松雄(新規)

原 時三(退職)

立花町 中村正規(新規)

荻田町 中村三郎(退職)

井本美良(新規)

柳川市 山田泰久(局長専任)

高橋晃治(新規)

甘木市 才田保次(センター)

上野和義(新規)

行橋市 正野 高(退職)

緒方誠二(異動)

また本年度、福祉活動専門員の補助金交付が決まり、次の方が専門員となりました。

川崎町 千住節子

福岡町 綾部明子

赤池町 池田 晃

この三町の専門員増員により、県内の市町村のうち半数以上の五〇ヶ所に専門員補助金がつくようになり、専門員の意義が深くなったことと思われる。

この他に次の町が法人になりました。
古賀町 ・ 宇美町

編集後記

●もう早いもので「まなこ」も発行して五年が経った。この間、古賀利春・熊本康正などの今は退いた専門員仲間の投稿を思い出すことができる。このまなこの記事はまさに、社協に位置する専門員の悩みと誇りで満々としてきた。社協の活動中核者である専門員の酒をくみかわし語りあった裏のエネルギータンクは活動が紹介できぬ内容ばかりである。

●県南八市の専門員と郡部町村専門員とが一体となりブロックの連絡協議会が胎動している。活動への資質を高めるには、相互学習、しかも自主的な活動がなによりも大切である。当然コミュニケーションの媒体である液体も必要となろう。これも楽しみである。

●熊本県と佐賀県の専門員連絡協議会の合同研修会が本年秋季に佐賀で催された。有意義であったという。沢山の事業の中で共感する人とのめぐりあい程、地元での活動での孤立防止に役だつものはない。あなたは何人の師をもっていますか。

●忘年会をやった折、何軒目かの飲み屋で隣にオジさんがいた。きけば「おれはボランティアだ」という。つまり自分の自主性と継続性と奉仕性と……でもって、ここに飲みにくるからだという。ごもっとも、我々も大にいろんな所で奉仕すべきである。では次号まで。
(編集員一同)